

横顔

就任インタビュー

若さを強みに 高知の地で飛躍を

2021年11月に新設された高知大学の腫瘍内科学の初代教授に、佐竹悠良氏が就任した。44歳で教室を率いることになった佐竹氏は、先進的な診療と研究、将来を見据えた学生教育に注力している。

高知大学医学部 腫瘍内科学

さ た け ひ ろ な が

佐竹 悠良 教授

2004年兵庫医科大学医学部卒業。八尾徳洲会総合病院、神戸市立医療センター中央市民病院、国立がん研究センター東病院、関西医科大学附属病院がんセンター学長特命准教授などを経て、2021年から現職。

高知大学医学部 腫瘍内科学

高知県南国市岡豊町小蓮185-1 ☎088-866-5811(代表)

<http://www.kochi-u.ac.jp/kms/courses/54/>

療機関と密に連携して常に患者へ寄り添うことを目標とし、実践している。

研究面では新しい治療薬と治療法の開発を目指し、基礎研究、基礎と臨床をつなぐトランスレーショナルリサーチ、臨床試験を推進する。既に日本臨床腫瘍研究グループ(JCOG)の活動として、佐竹氏が主体となった新規薬剤の第Ⅲ相臨床試験を進めている。

「世界へ向けて新たなエビデンスを発信し、高知大学の存在感を高めたい。保険適用前のものを含め、県内の患者さんに新しい薬剤や治療法を提供するためにも、臨床試験には今後も力を入れていきます」

学生教育にも注力

教育に関しては、大きな課題がある。高知県に限らず、腫瘍内科医は全国的に充足していない状況で、高齢化に伴い今後がん患者の増加が予測されるため、若手医師の育成は急務だ。佐竹氏は、まず学生の教育を充実させようとしている。

「腫瘍内科では特定の臓器に偏らず、がんという疾患を俯瞰的に診ることができ、薬物療法やがんゲノム医療など最先端の医療に触れることもできる。魅力を生きたちに伝えつつ、充実した臨床研修制度を構築して、多くの人に入局してほしいと思っています」

め現在教室員はいないが、2022年度には複数の教室員を迎える。希望する若手医師には国立がん研究センターへの国内留学や、関西圏のハイブリウムセンターでの研修を推奨することを想定している。

恩師からの学び 教室運営に生かす

イメージする理想の教授像はどのようなものか。佐竹氏は恩師の5人を挙げた。まずは、「部下にも平等に接して自主性を重んじる姿勢を貫いていた」という、神戸市立医療センター中央市民病院時代に師事した辻晃仁氏(現・香川大学医学部臨床腫瘍学講座教授)。

そして国立がん研究センター東病院で上司だった矢野友規氏、吉野孝之氏、田原信氏、武藤学氏(現・京都大学腫瘍薬物治療学講座教授)は、世界を相手に日本のがん診療レベルを高めるため、部下を引っ張って研究にまい進しており、その姿勢に感銘を受けた。恩師たちの姿勢を参考にしながら、全員に共通していた「患者さんを尊重し、大切にすること」も重視していく。

「今後先輩方から学び、ご指導をいただきつつ、若さを強みにして全力で進みたい。若手医師に対しては同じような目線で向き合い、新たな診療や研究に取り組んでいきます」

地域のがん診療 底上げ図る

医師として研さんを積んできた関西を離れ、教授に就任した。初めての土地で新設された教室を率いる立場となり、「大学や周囲の先生方から歓迎してもらい、多くのサポートをしていた

者さんに寄り添っていかには、信頼を勝ち取っていくことが、重要だと思っています」と抱負を語る。

佐竹氏が掲げる教室の運営方針は、診療・研究・教育のいずれかに偏ることなく、3本柱全てを伸ばすこと。そして大病院及び県内、四国全体のがん診療のレベルを底上げすることだ。

がんに対する薬物療法は、分子標的治療薬や免疫チェックポイント阻害剤が活用され、さらにはがんゲノム医療が登場するなど日々発展している。さらに細分化、高度化が進むことが予想され、先進的な医療を適切に提供するのと同時に、

県内の「かじ取り役」として、臓器別の診療科や地域の医